

大阪・大坂城跡

この堀は、より新しい時期の井戸から出土した遺物との関係から、この堀は慶長三年（一五九八）のいわゆる三の丸造成に伴つて掘削されたものと考えられる。

- 1 所在地 大阪市中央区大手前三丁目
- 2 調査期間 二〇〇三年（平15）六月～二〇〇四年三月
- 3 発掘機関 財團大阪府文化財センター
- 4 調査担当者 江浦 洋・島内洋二
- 5 遺跡の種類 城下町跡・城郭跡
- 6 遺跡の年代 一六世紀末～一七世紀初頭
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

今回の調査は、大阪府警察本部棟新築二期工事に伴うものである。本号の難波宮跡(2)と同一地点の調査であるが、年代や性格が大きく異なるため、別遺跡として扱っている。調査では、ほぼ全域から豊臣期の大坂城にかかる堀を検出してい

る（堀八三）。

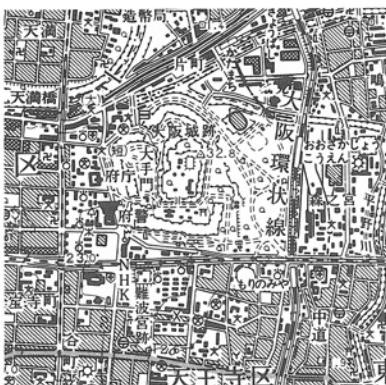
堀八三は位置的にみて、大坂城二の丸に設けられた大手口を逆コの字状に囲む防御施設であると考えられ

る。この堀より新しい時期の井戸から出土した遺物との関係から、この堀は慶長三年（一五九八）のいわゆる三の丸造成に伴つて掘削されたものと考えられる。

この堀は、北側でやや西に振りながら調査地を南北に縦断するものであり、調査地の南端部では東に折れて大坂城の外堀方向にのびている。検出長は南北約一一〇m 東折部分約五〇m、最大幅は約二五mを測る。堀の深さは、上面を削平されているが、平均して約六mを測る。構造は、石垣をもたない素掘りであるが、法面の角度が四〇～四五度の急斜面になつており、さらに底面は方形の土坑がランダムに掘削された障子堀となつていて、

また、埋土の観察から、短期間かつ一気に埋め戻された状況が看取される。実際、調査では堀の埋め戻し過程で仮設された工事用道路を數カ所で検出しており、堀の埋め戻し作業が計画的かつ組織的に進められたことを窺うことができる。豊臣期の大坂城の堀が埋め戻された歴史的事実としては、慶長一九年、大坂冬の陣直後の徳川氏による堀の埋め戻しが第一候補となるが、後述の如く、出土木簡はそれと矛盾しない。

そのほか、特筆すべき遺構としては堀の内側斜面からトーチカ状遺構を検出している。この遺構は杭と梁で骨組みを作り、前方には竹しがらみで護岸した土塁を設けている。堀底に侵入した敵兵を銃によつて迎撃する目的で、大坂冬の陣直前に急造した施設であると



(大阪東北部)

考へてゐる。

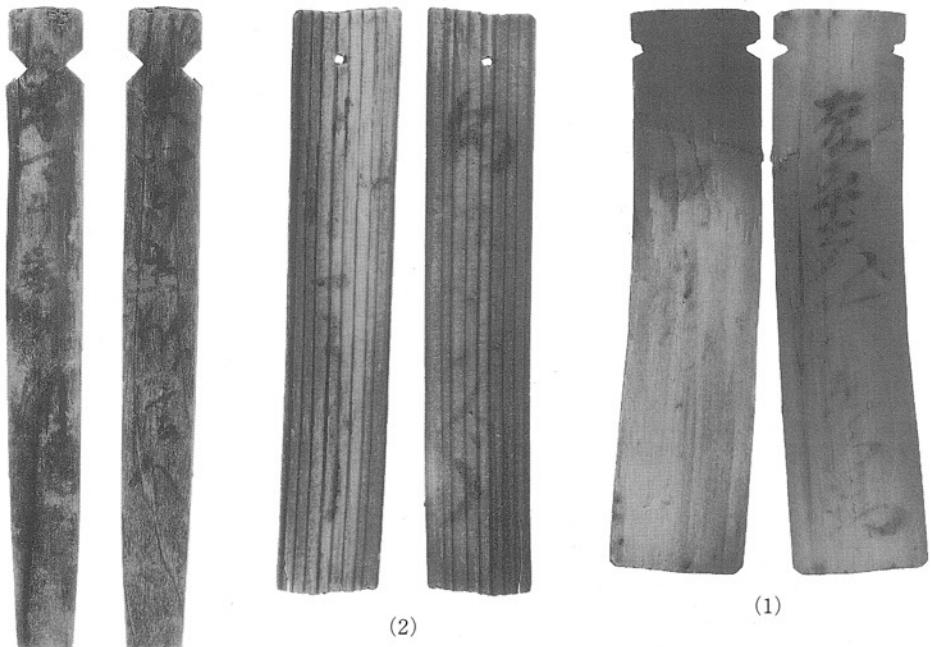
今回の調査で出土した木簡の大半は堀からの出土であるが、堀の掘削によつて生じた土砂で埋没した遺構面からも、数点の木簡が出土してゐる。土坑一六二としたもののは、礎石建物に近接して、多種多様な遺物とともに、魚骨や貝殻など食物残滓が集積した遺構であり、廃棄土坑と考えられるものである。

8 木簡の釈文・内容

堀八三

- (1) 「▽菅平右衛門様 赤右衛門」
・「▽ 鴨 □衛門」 137×33×5 032
• 「○酒九升八合入」
• 「○□□一□分」 144×26×5 011
「○セキリ右衛門尉殿弥」 163×30×9 051
- (2) 「▽千飼五俵入」
• 「六匁 二百九十八」 (274)×21×3 019
- (3) 「六匁 二百九十八」 (325)×34×2 019
- (4) 「▽わだなへ忠□」 [三郎カ] 226×36×7 032
• 「△内カ 五ヶ村 □」 [森カ] (34)×(102)×5 081
- (5) 「▽中丞カ 様 佐平」 (180)×32×7 039
• 「▽十 □□ 弥」 (108)×20×6 032
• 「▽正谷七丁目」 (94)×13×3 019
• 「▽千飼五俵入」
• 「六匁 二百九十八」 (274)×21×3 019
• 「△内カ 五ヶ村 □」 [森カ] (34)×(102)×5 081
• 「△内カ 五ヶ村 □」 [森カ] (213)×25×3 019

(20)	「□」	28×12×2 065
(13)	・「▽□□□」 からすみ □□□〔十一カ〕	277×39×5 032
(14)	・「▽預ケ うちや」 「ち□うあん てい□」 〔十六カ〕	(153)×26×2 019
(15)	「□□□□□○」 〔斗カ〕	(152)×24×3 019
(16)	「▽□□□□」 〔たいこカ〕	(166)×29×4 033
(17)	「慶長 拾三年 (梵字)[釋カ] □奉□日天尊并心經秘鍵十一卷 御子孫繁昌処 極月 吉祥日」 522×103×7 011	(1)は上端部の両側に切り込みを入れた付札木簡。「菅平右衛門」に「鴨」を送った際の荷札であると考えられる。菅平右衛門達長は、元は淡路の海賊衆であるが、一時は豊臣水軍の一翼を担つた武将である。関ヶ原の戦で西軍につき、領地を没収される。その後、藤堂高虎軍として大坂冬の陣に参陣する。大坂城の堀の埋め戻しに際して、藤堂高虎と口論になり、慶長一九年(1614年)二月二六日に切腹する。この木簡は、検出した堀が大坂冬の陣講和直後に埋められたものであることとを確実なものとし、かつその埋め戻しに藤堂高虎軍が関与していくこととを窺わせる点できわめて重要な意味をもつものである。 (2)は上下を整形して、上端部に穿孔を施した酒の付札木簡。(3)は上端部に穿孔を施し、下端部は先を尖らせている。送り先と考えられる人名のみが記されている。(4)は上下端ともに欠損するが、上部には切り込みの一部が残る。(5)は上端部に切り込みを入れた付札木簡。表には送り先と送り主の人名が書かれる。(6)は左右に切り込みを入れた付札木簡である。送り先と考えられる人名のみを記している。(7)は上部を欠損しているものの、ほぼ完存。表に屋号と名前、裏に地名が記される。「道正谷」は現在の道修町であろうか。(8)は上部の左右に切り込みを入れた「干鯛」の付札木簡。上端部が方形を呈する特徴的な形状である。(9)は下部に欠損が見られるが墨痕は



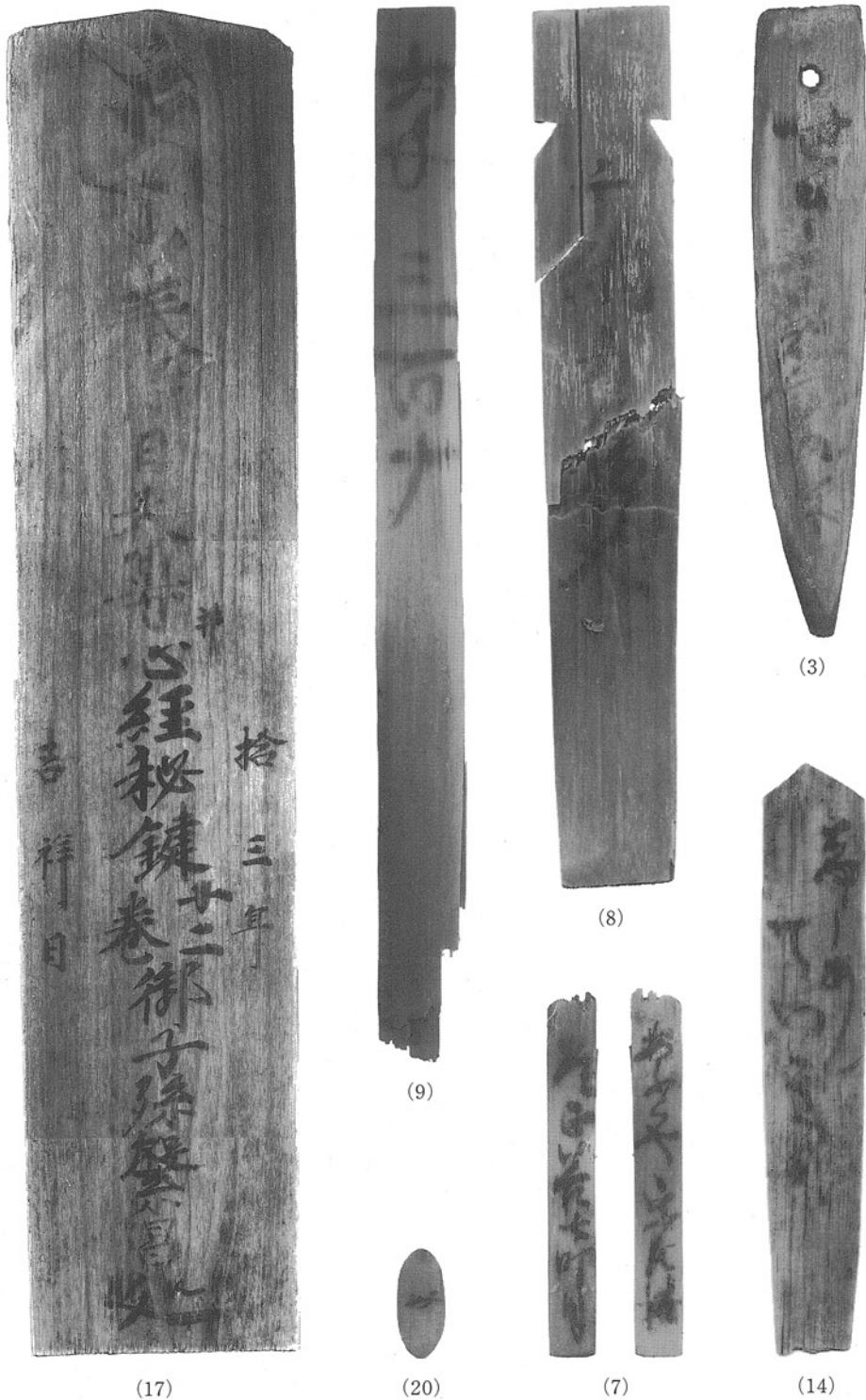
(19)



(19)

1 : 2 赤外線デジタル写真

2003年出土の木簡



赤外線デジタル写真 (17)のみ1:3, その他は1:2

明瞭。短冊形の木簡であるが、裏面は未整形であり、左右両端の調整も丁寧ではない。(10)もほぼ同形状の木簡であり、墨書きは(9)と同一人物の手によるものである可能性が高い。(11)は上部端を欠損しており、全容は不明。三行にわたって墨書きがあり、文書木簡であると考えられる。(12)は下端部を欠損。全体に墨痕が不明瞭。(13)は上部の左右に切り込みを入れた「からすみ」の付札木簡。(14)は上端部を圭頭形に加工する。(15)は上端部を圭頭形とする。下端部は欠損しているが、上端部同様に圭頭形にしていた可能性が高い。下端近くに、やや偏つて穿孔がある。(16)は上部に左右切り込みを入れ、下部は欠損しているものの先端部は尖らせていたと考えられる。

(17)は大型の祈禱札である。上半部は不明瞭であるが、一文字目には種子である梵字が書かれている。「御子孫繁昌」のために「日天尊」に関わる仏典と「心經秘鍵」一二巻を読経して祈禱したことが窺われる。右側には、一六〇八年にあたる「慶長拾三年」、左側には一二月にあたる「極月」と記されている。

(18)は将棋の駒。上部を尖らせた五角形で、表のみ「金将」と書かれる。駒尻が厚く、水無瀬駒系の将棋駒であると考えられる。(19)は上部の左右に切り込みを入れた米の付札木簡。表裏とも同じ内容であった可能性が高く、「京杓」を用いて計量されたことが窺われる。ちなみに、文禄三年（一五九四）、豊臣秀吉は全国の杓を「京杓」に統一している。

(20)は橢円形を呈する木簡である。全体に丁寧に成形されており、一方にのみ明瞭な墨痕がある。内容、用途ともに不明である。

また、今回報告した木簡以外に経木が多数出土している。経木は堀の埋め戻し土中からまとまって出土したものであり、破片数にして五三九点を数える。法量は平均して長さ三八六mm幅三六mm厚さ一mmを測る。上部は圭頭形を呈している。この圭頭の頂部片は一〇八点が確認できる。四九点には墨書きが残り、いずれも「南無阿弥陀仏」の六字名号が書かれていたものと考えられる。文字には楷書とくずしたものとがあり、複数の人物によつて書写されたものであることがわかる。

なお、今回の調査で出土した多数の木製品は、現在もなお洗浄中である。したがつて、今後の整理過程でさらに木簡の数が増すことは確実であることを付記しておく。

木簡の叢談にあたつては、北川央・跡部信（大阪城天守閣）、豆谷浩之・井上智勝・八木滋（大阪歴史博物館）、鳥居信子（財大阪市文化財協会）、木下密運（千手寺）の各氏にご教示を得た。

（島内洋一・江浦 洋）